

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1372 号	氏名	吉田 勇一
審査担当者	主査	室谷健太	(印)
	副主査	吉田典子	(印)
	副主査	松瀬博夫	(印)
主論文題目：EFFICACY OF CATEGORIES IN PHYSICAL THERAPY FOR IMPROVING MOTOR FUNCTION OF PATIENTS WITH STROKE (脳卒中患者の運動機能を改善する理学療法の効果)			

審査結果の要旨 (意見)

本研究は九州・山口の7施設の回復期病棟入院中の脳卒中後片麻痺患者 106 名を対象に、理学療法の内容 (PT1~PT4 の時間の使い方) がどのように予後と関連するかを明らかにしようとした多施設共同前向き観察研究である。新しい評価項目として理学療法前後の起き上がり時間の変化率(Relative shortening ratio; RSR)を定義し、交絡因子調整を注意深く実施した重回帰分析に基づき PT2 が RSR の改善に寄与することを見出した。RSR は既存指標の FIM 利得とも相関があることが示され、理学療法の効果の評価における新たな指標になり得る可能性も示唆された。理学療法の時間の使い方と予後の関係性に対して統計学的な視点から定量的な評価を試みた本研究は博士の学位に相応しい研究と考えられる。

論文要旨

理学療法は 1 単位 20 分の単位制で実施されているが、効果的な時間配分については未だ明らかにされていない。本論文では、起き上がり動作を運動機能の一指標として、理学療法の時間配分の効果について検証した。研究デザインは多施設共同の前向き観察研究とした。対象は 2020 年 4 月から 2021 年 3 月にかけて回復期病棟で理学療法を受けた脳卒中患者 106 名とした。13 週間の理学療法の前後で背臥位から座位への起き上がり動作の時間を測定し、短縮時間の割合をエンドポイントとした。また、理学療法を 5 つに分類して、理学療法士の記録から各カテゴリーの時間を得た (理学療法なし、静止姿勢での準備運動、日常生活動作の練習、歩行練習、特別な機器による練習)。エンドポイントとカテゴリーの時間に関連している要因を選定するためのスクリーニングを行い、理学療法実施前の起き上がり時間を交絡因子として同定した。多変量解析により交絡因子を調整した予測式が得られ、日常生活動作の練習時間を多く配分した理学療法は起き上がり時間をより短縮する可能性があることが示唆された。